18禁
きゅーぽん4！
はぁと
饅頭
マニア

Heart Manju Mania
Q-Pon 4

最強のコンボボン

作：茉森 晶
画：亜方逸樹

■まえがき■

ども! はぁと饅頭マニアのSD以外は絵描くの諦めてる方、
茉森です! はじめましての方も、まいどの方も、
手に取って下さいましてありがとうございます!
Q-Xオンリー本、きゅーぽん! 4冊目です。

さて、次ページから早速始まる漫画ですが、今回は
『幻月のバンドオラ』のメインヒロイン、
『まっひー』こと『おにぎりさん』こと鬼切真姫さんです。
「純情なのにエロ担当者扱い」という弄られキャラな
八の字眉のお嬢様っ娘。ヒロイン3人の中で人気は
華麗なる最下位だったっけなぁ……(笑)
可哀相でしたが、他の二人がわかりやすい特徴多かった
ので、正統派ヒロインが目立たないのは必然なのですね。

今回、エロ担当の真姫さんですし、とにかくエロを
強化した漫画にするべく、ふたりで頑張ってみました。
(もちろん毎回エロくしようとしてますが)
ストーリー的には個別ルートに入ってから少し経った頃。
部屋で倒れた真姫、文樹がベランダを越えて
助けに来る……その少し前のお話。
ま、お話なんてわからなくともエロさえ感じてもらえれば!

漫画のあとには、逸樹のコメントページと
さらにイラスト2点。
イラストは「挿絵っぽく見えるかな」と
小説風のテキストと見開きセットにしてみました。
久しぶりに小説式の文章書いて楽しかったです……!

ではでは、またあとがきで!

疼く…

渦巻く……

わたしはきっと
このままなら
おかしくなる

どうして性欲なんてあるの？
未来に何を残そうというの？
わたしに……未来なんてあるの？

はぁ……
はあッ

エロースさん……
エロースさん！

まあまあ 真姫ったら
今日も発作が
ひどくて大変ね

くっ……
誰のせい……なんですか

ひどくなってるのは
アタイのせいじゃ
ないったら

ぎゅっ

エレディーユ様が指名した
コアゲーマー……
あの男がマジメに働いてるから
でしょ？

う……っ

はっ

はっ

文樹さんと出会って
数日しか経ってないのに
遠慮もなく膨らむわたしの欲望

役目を終えるまでに
どこまで大きくなるのか
わたしの心は
耐えきれるのか……

フフ……
それにしても久しぶり
アナタがアタイに
繋げてくるなんて

っ……

アタイを使うと
刺激が強すぎる って
禁じてたのに

普通のオナニーじゃ
とても足りないから直接
頭にケーブル繋いで
ココに来るしかない

アタイとしては快感エナジー
補充させてもらって
ありがたい限りだけど……

も もういいでしょう！
早く準備を……ッひ！

ビクッッ

はっぁ……
あああぁぁあッ!!

びくっ

きゅゅっっっ

あらら……
本当に余裕なさそう

至急 アナタの求める
シチュエーションを
用意するわ……

ねっと！

なっ……ッ!?

文樹さん……とuniさん？

真姫ったら……もしかしてコレNTRな趣向ってこと？

ち　違っ！わた　わたすしそんなこと考えては……！

フミキ……アタシがちゃんとイかせてあげるわね　フフッ

ちゅぅっ

違……わないのかな

結ばれることなんてない……わたしはこれを見ながら自分を慰めるのがお似合い

ふっ……ん

あんなスゴいの……わたしのココにも入る……のかなぁ

ぬるっ…

んっ……ぐ……っふ！

ふうっんっ

ぐぷっ

ちゅぷっ

は激しすぎ！あんなにするものなの？

くぅ……見てるだけで胸……熱いっ！

んぅ……ふくっ！

ふぁ……あ？

射精して……る？お口の中に……

ぴゅっ

ぴゅっ

びくっ

ぢゅっ

ぢゅっ

フフッ簡単にイッちゃって……もー

ーーくん

そんなにアタシの口気持ちよかった？

とろーー……

本番で長持ちするようにって思ったのに無駄だったかしら？

あ……入っ……

ぬぬ。

ねっ

んはうぅぅッ!!

……ッ！

ずぶぶぶっ

ぷちゅっ

好きな人が……目の前で他の女性と繋がってる
あ……ふっ！
わたし……どうしてこんなに興奮するの？
んぁあッ！
ぐちゅっ
ちゅっ
真姫がそれだけ変態さんだから……でしょ？
ハッ……？
ち……千歩子？
ほらほら……見て？私も文樹と繋がっちゃったよ
違う現実とはいえ……悔しくないわけ？
くちゅっ
ぐちゅっ
く悔しいとか……
ちゅ
ちゅぽっ
ぐじゅっ
文樹さんが誰と結ばれようとわたしは……っ

強情だね

はっ

はぁ

自分の膣内がコレの形に変えられてるイメージしてオナってんじゃないの？

そそそ そなんなこここ……ことっ！

NTRって言ってもさー結局その本人が欲しいってことなんだから

ち違う……もん

……そ？

じゃ そこで見てればいいよ

私はもっと子宮口グリグリしてもらうから

ししきゅ……ッ！

んぐ……あぁぁあッ!!

胸が……熱い？

ううん……痛いよ

かぁっ

千歩子のこと……大好きだけど
わたしよりお似合いかもしれないけど……

イヤ…嫌ッ！
千歩子でも嫌です！
わた わたしは
文樹さんが……っ！
す……ぁひっ！
くふぅぅぅぅッ!!
ぴくっ
ぴくっ
ぴくんっ
ぶるるる
それで
いいんだよ
はっ…
はっ…
はっ……はッ…
え……えっ？
真姫が自分自身で
感じて…自分自身で
決めるの
う嘘……
文樹さんが
いっぱい…？
おにぎりさん…
は…わま 待って
ちょっ 待っ……！
はぁ
はぁ
はっ
はっ
欲望のままに
俺を求めて
くれていいんだ
やみ 見ない…で
下さ……ひっ！
そんなに動揺しなくて
いいんだって
真姫が今 本心から
求める欲望イメージ
なんだから……

こんな…あひっ！
エッチすぎること……
求めなてな…いですぅ！

ふ……あ
ちカ…入らな…

はぁ

ふふ……エッチだって
認めちゃいなよ
真姫にも
幸せを求める
権利があるんだよ

はぁ

はぁ

文樹さんの指が……舌が……
体中を駆け巡って……っ！

こんな……犯されてるみたいな
シチュで…わたし……

びくんっ

ちゅっ

ぞくぞく

ぬるっ

くちゅくちゅ

ぅあ……ふ…はッ！

ひあぁッ！
やっ や…ぅあッ！

快感……お 大き
すぎて……おかしく
……なな っ あっ！

や……はうっ!?
そこ…だめえっ!!

ぬるっ

そこ…ってココ？
こうしたらダメなの？

はひぃ…んんッ！

ちゅぷ

はっ…
耳と頬と唇と腋と鎖骨と
胸とおなかと太ももと
そして……
ぞくっ
ぞくっ
ぞくっ
あっ
あぁ…
あっ
あっ
びくんっ
あっ
えもっ…
一番感じる女の部品
えもっ…
はっ!
あっ…
やっぱりこれが……
わたしの本質?
わたしの敏感な箇所
すべてを
好きな人が触れている
ふあっ!
びくっ!
びくっびくっ
快感レベル……た高すぎて…
イけないままま ピークが続
あっあっあっこれ絶対危っ!
はあっくぅ!
ぁひぃんッ!!

はぐぅぅぅッ!!

ぶんっ

びくっ びくっ

んあッ!! は! ぁはあッ!!

ぷしゅっ

はひ……ひゃ! め……やめて……え!

ちっ ちっ ちっ

めめ…め

イッて…ますぅ…ううッ! これ以上…上に…… 行けまうませんんッ!!

ぱちぱっ

駄目だよ……今まで ずっと抑えてきたんだろ? 自分の欲望…… 自由にしてやろうよ

びくびく

ちゅ…

ちゅぷ

びくっ びくっ

ひぃ…いあッ! ほほんと…に む無理ぃ! ですぅ! ひひっ…はああッ!!

ぅあ…… かっ……ぁふ…っ

はっ

はぅあ…

こんなレベル… 想像して…な……

かくん

おにぎりさん… 気絶しちゃった?

まだまだ幸せ感じて もらわないと……ふふふっ

ふ……ふあ…？
ほらほら 休みは終わりだよ
ふえ……ぁわ？
わわ!?
ひあ……
ほ ほんほんもも本物……近ッ！
ほら…近くでよく見て
おにぎりさんが欲しいの…コレだよね
ひくっ
はぁっ
ひん…っ！
怖がらないで……ただ気持ちよくなって欲しいだけだから
はぁ
はぁ
はっ
コレで直接…おにぎりさんの体中に触れたい……
わわたしなんかの体……求めてくれるんですか？
じくっ
そうだよいやらしくて綺麗な体……
もっともっと感じさせたい…
むにぃっ
ぬるる…

空気も触れない
その内側の……
柔らかな粘膜まで全部

はぁ

はぁ

わわたしの…内側…

はっ…

触ってない所が
残らないくらい
触らせて欲しいんだ

ほら もう入っちゃう…

ちゅぷぷ…

んひっ

はぁ…

ん……ッ！

ぷちぷち

ぐぷっ

ひあぁぁぁぁぁぁッ!!

痛い……けど 確かに
好きな人を一番近くに
感じてる
言われた通り……
内側も外側も全部
優しく舐め上げられる
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
はぁぁぁぁぁ

人として……
ひとりの女の子として……
おにぎりさん痛い？
幸せの水飴でコーティングされていく
このまま愛される幸せに狂ってしまえば――

おにぎりさん
ごめん……ね

はッ……ふぅ……
は……はぅう…？

俺は一度フられたけど…
本気じゃなかったんだって
勝手に思ってる

ハッ

ハッ

ハッ

ぎゅっ

はぁ…

あっ……ぅあ…

たとえ君が何になろうと

君を好きでいるから……

ひとりだって思わないで——

う……んん…

あ……お おにぎりさん
気がついた？

ハッ……
ふ 文樹さんっ!?

びくっ

あれ……まだ夢……え？
どんな夢……夢…だったっけ？…

ごっごめん！
ベランダから
入っちゃって……

憶えているのは
文樹さんの優しさだけ
でも わたしはもう――

ふぅ――…

え……わわ!?
ごごめん！ 泣かないで！

いえ……辛いけど
この人の優しさを受け止めよう

あ……
いいえ

なんでも……
ないんです

冷静には話せないかな…
でも……好きな人が
好きだと言ってくれるんだ

どんな結末が待っているか
わからない だけど……
ホントの想いを伝えよう

ここからは
わたしの
できる限りで――

■まいどー亜方逸樹でございます『幻月のパンドオラ』からまっひーまんがいかがでしたでしょうか？　まっひーかわいいよまっひー。
アイノ漫画楽しみにしてた方ごめんなさい。また次の機会とゆーコトで…。作画の都合で相変わらずページ数的に少なくてあれですが、
相方、茉森のこだわりネームを楽しんでもらえてれば幸いです。ところで今回から同人誌もオールデジタル作業で制作してみました。
仕上がりはどうですかね？　やっぱりなれないと、どのぐらいの仕上げがいいかさっぱりわからないですねー。
どう印刷されてるか会場でのお楽しみードキドキ。
■さて本業の進み具合ですけど、設定、キャラクターとかは出来上がってきてるので早くみんなに見てもらいたいんですけど…
それは商業的な都合とか色々ありましてまだまだ算段がつかない状態です。ゆるゆるとお待ちくださいませ。
まー次のゲームが売れないとQ－Xの存続に関わるので気張ってがんばりますー
ではまたー。

「本当に……いいのか？」
念入りに撫で回していた肉芽から舌を離し、問いかける。その溜息のような声が敏感な箇所にかかり、仰向けでも綺麗な形を保つ凛子の乳房がフルリと揺れる。
ちょうど今、階下のコンビニ店内デザートコーナーで大プッシュ中の『白くて丸くて大きなミルクババロア』（二百五十円）のよう――そんな俗っぽい喩えになってしまう自分の感性にちょっとヘコんでみる勇太郎だった。
「しつっこいなぁ。その躊躇、ボクを信用してないと受け取るけど」
実の妹と付き合うことになって早半年。『バレる要素を増やさない』というドライな理由から、凛子自身がソレを禁止したはずである。
「信用してる……けどさ」
煮え切らない勇太郎のその言葉に、完熟桃のごとくピンク色に上気した頬をプクッと膨らませる。
「もう……ボクとしたくないわけ？」
「し、したくないわけない……だろ」
凛子が全幅の信頼を寄せる新型ピル。『挿入禁止』だった最初期の頃から完璧に調べあげ用意していたくせに、その日になるまで匂わせもしないというのはサプライズプレゼントのつもりなのか。
「二ヶ月前、兄ちゃんがボクの胸触りながら『ちょっと張ってる』って言ったの憶えてる？　あの頃から服用してて、下準備は全部済ませてあるから。数年前は心配されてた副作用も最小限になってるし、ボクくらいの年齢のテストも――」
「わかった、わかったって！　まったく、生々しいことをペラペラと恥ずかしげもなく……」
「恥ずかしいって何。ボク達はそこらのバカップルと違う。もっと真剣に考えなよ。正しい知識があってこその近親相姦でしょ」
凛子の言うことはいつも正しい。が、ドライすぎるのも事実。
「凛子が真剣に考えるのは、この関係を続けていくためだもんね。そんな凛子も……僕は好きだよ」
「え……な、ななななに急に。恥ずかしいのはそっちじゃない？」
「あはは、僕もそう思うけどさ。でも、言いたくなっちゃったんだからしょうがないだろ」
普段言いなりの勇太郎が珍しく企てたラヴコール大作戦が、いかなる時もクールな凛子の心を掻き乱す。
「その気持ちはもちろん嬉しいんだけどさ。ちゃんとした言葉も聞きたいんだよ」
「どういう言葉を……言えっての？」
「凛子はいつも何でも知ってるのに、そういうことは自分で考えられないのかな？」
ちょっと意地悪言いながら凛子の瞳を見つめた。急に恥ずかしくなったのか、中途半端に胸を手で隠しながら凛子は僕を睨む。
「な、なんだよ、怒ったのか？　僕は馬鹿にするつもりじゃ……」
「わかってるってば」
嘘のバレた子供のように唇を尖らせながら言う。小さく体をよじり、三十秒ほど考えた結果、あらためて兄兼彼氏を睨め付けた。
「ボクは……兄ちゃんとセックスしたいの。本気でそう思うから、いっぱい調べたよ。好きだから。ずっとこのままでいたいから……」
あらためて。実の妹に対して何をこんなにドキドキキュンキュンしているのか。広い世界で、限られたごく少数の『兄』だけが感じることのできる気持ち。『妹が可愛すぎるのでセックスしてみた』なんて、どこかにスレでも立てようものなら、おそらく一瞬で『もっとうまく釣れ』『リアルで妹好きとかアリエンキモイ』式のレスで埋まってしまうな。
しかし、勇太郎は確かに、そんな特別に特別なものを感じていた。
「なにボーッと見てんの。恥ずかしいセリフ言わされて、正直もうネットに逃げ込みたいくらいなんだけど？」
「あ、ご、ごめんごめん。そうだよな、今、現実なんだもんな」
「うっ……だ、だから意識させないでよ！　いつまで女を待たせるつも

「ふむ、とても似合ってるぞ。うんうん」
散々もめてはみたものの、最終的にはテュロウの要望を聞き入れてしまう。そんな自分を情けなく思いつつも、すべてがうまく行き始めている今、水をさす必要もないかと自分に言い聞かせるみさらだった。
「しかし、この服を着てその……い、いたすことに何の意味があるのだ？ 千名希の世界での制服など、そなたは何の思い入れもないであろう」
「男というものはだな、女&制服という組み合わせにロマンを感じてしまうものなのだ。だが、どうだ？ ノエン学園は学年によって僅かな変化もあるにはあるが、基本的にはほぼ変わらない。このままでよいのか？ いや、よい訳がない！」
暑苦しく、拳を握り力説する。これまでのっぺりとした感情しか出せていなかった男が少年のようにキラキラと目を輝かせて。
『夜の営みを自由にしてよい』式なことを言ってしまったのは、やはり早計であったか。これから先、どのような恥ずかしい衣装を持って来ることやら――。
背すじにおぞましい寒気を感じ、みさらは我が身を抱きすくめる。その身につけている千名希の中学時代のセーラー服は、いくらみさらが細身とはいえ、立派な二つのふくらみはギュウギュウに締めつけられ、ぷっくりと突起を浮かび上がらせていた。
「うんうん、みさらの新鮮な魅力を感じるぞ。これを見てくれ」
「ぬあ……ぬ、脱いでもおらぬのに何なのだその反り方は！」
「だからその着ているのがエロくて興奮するのだと……ええい、もう辛抱たまらん！」
現実世界でいうところのルパンダイブ（現実でもめったに言わない）で一気に服を脱ぎ捨て、テュロウはみさらをベッドへ押し倒す。
「ひゃ？ ま、待て！ 千名希の贈り物が汚れて……うあっ！」
結局、そのセーラー服を一気に開き、テュロウは待ちきれぬとばかりに両の手で形の整った乳房を掴む。その指を小刻みに沈ませながら、人差し指は別の生き物のごとく動き、ツンと尖った乳首を弾く。
「ぁうんっ！ やっ、ちょっ、がっつくでない！ みさらはもう、そなたの元から離れることはないのだから……」
「結ばれたから落ち着いてよい、などというのか？ 好きだからこそ、この気持ちそのまま盛り上がるのは当然のことだ」
テュロウはむしろさらに鼻息を荒らげ、両乳房を攻めつつもプリーツスカートの中に頭を突入させる。シルク地のショーツの中心に尖らせた舌を押しつけると、「きゃう！」という少女のような悲鳴。さらに、ぬめりを帯びた体液がジワリと漏れ出る。
十分な潤いを確認し、目にも止まらぬ早業でショーツをずり下ろす。何か言う暇も与えず、裂け目に溜まった蜜を舐めとると、みさらの体が釣り上げられた魚のように撓い、その瞬間、新たな潤滑油が尻を伝って流れていく。
「十分すぎる濡れ具合だな。前戯が少なくて不満かもしれんが……もう我慢できん。すまん」
「ふ、不満だなどと……みさらはそのようなことっ！」
みさらはそう言って、真っ赤に染まった頬を乳首よりも先に手で隠す。
「い、いや、しかし、ちょうどよい機会だ。いつもそなたに攻められてばかり……妻として、これではいかん」
ベッドの上に立ち上がった乱れセーラーなみさらは、見下ろすようにテュロウを睨む。王妃として貞淑にと心がけているつもりではあるが、やはりなかなか長年磨いてきた切れ味は隠しようもなく。
「今日はみさらが満足させる。そなたはおとなしく寝ておるがよい」
照れ隠しがさらなる高飛車を呼び起こす。久しぶりに見る『らしい』表情に、テュロウはある種の心地よさを感じていた。
天を突く剛棒をまたぎ、みさらはコクンと喉を鳴らす。いつもと違い、入ってくる瞬間を自分でコントロールすることに、予想以上の緊張が走る。自分に言い聞かせるようにひとつ頷くと、濡れそぼつ下の口がテュロウの巨塔を一気に飲み込んだ。
「んっ……くぅうううッ！」

■あとがき■

ここまで読んで下さってありがとうございます！　あらためまして、茉森です。
『きゅーぽん』も今回で４冊目。
ファンディスクの代わり……ではないですが『的なものとして始め、何より自分達が楽しんで作っています。読んで下さる方にも楽しんでもらえていれば最高です。

ぶっちゃけ話ですが、最初は自社パロなんて全然売れないんじゃないかと思っていたんですよね。こうして続けていけるのは買って下さる皆様のお陰。本業の方は、言えないような事情もあり、何かと苦労してしまっているのですが、勝負をかけるべく気合入れてやっていきたいと思います。結果的にこんなスローペースでしかやれていないので、なかなか「応援して下さい」とも言いにくいのですが……それでも応援して下さる皆様へ最大限の感謝を。本当にありがとうございます……！

さて、この本は今年３月、東日本の大災害・福島の原発事故があってから最初のコミックマーケット合わせとなります。
たくさんの方が、今現在も大変な生活を強いられています。
こんな本の中ですが、心からお見舞い申し上げます。

私達も個人的に義捐金寄付をしていますが、会社としての力など無く……歯がゆい想いがありました。が、何もできない限りは今まで通り普段通りできることをやるしかなく。今回の夏コミ、仕事のこともあって悩んだのですが本格的に忙しくなる前の最後のイベントとして、やはり参加することにしました。

あらためて、それぞれ大変な思いをされている方が一日も早く良い状況になりますよう祈っております。

ではでは、今回はこれにて。
またいつか、お会いできますように！

■＝きゅーぽん4！＝■
発行　はぁと饅頭マニア
発行日　2011年8月14日
即売会価格　400円
印刷　ホープ21様
いつもお世話になってます！

連絡先：show@matumori.sakura.ne.jp
サークルブログ：http://hmm.sblo.jp/
Twitter：http://twitter.com/Matumori
http://twitter.com/akataizki

ちーぱい！

ちーぱい研究会